

## パネル発表「科学的な思考力の芽生えを育む動物飼育の実践」

岡村 廣

### 1 「幼児の科学的な思考力の芽生え」の姿とは

私は、「幼児の科学的な思考力の芽生え」の姿を次の3つと捉えている。

- 自然に触れ合い驚き・感動する姿
- 生き物に接し、命を大切に作る姿
- 仲間と協力し、遊びを創造する姿

### 2 「幼児の科学的な思考力の芽生え」を育成するためには

次の3つの視点が大切であると考えます。

- ① 自然に親しみ、そのおもしろさ・偉大さを子どもに十分に感じさせること
- ② 環境の構成を意図的に行うこと
- ③ これまでの経験や体験の積み重ねを大切に活動と援助を行うこと

今回は、上記「②環境の構成を意図的に行う」という視点から「5歳児とうさぎの保育実践」を紹介する。特に、生き物とのかかわりを考え、飼育環境の見直しを行う。

### 3 保育実践

#### (1) これまでのうさぎとのかかわり



一昨年まで園で飼っていた二羽のうさぎは高齢のため、直接触れたり、世話したりすることができなかつた。そして、夏の猛暑に体力を奪われ二羽とも亡くなってしまい、悲しい別れを経験した。

昨春、子ども達と生き物とのかかわり（直接体験、五感をとおした）をもたせたいという思いから、うさぎを飼育することにした。

#### (2) うさぎとの出会い（4月）

保育室で新しいうさぎと出会った子ども達。年長テラス前のゲージにうさぎを放すと、早速うさぎに駆け寄り「うさぎちゃん」と優しく語り掛けながら撫でていた。「ふさふさしているよ」と触り心地のよさを実感。絵本でうさぎの食べ物を調べ始めた。クローバーやタンポポを食べることを知り、テラス前に生えているクローバーを取ってうさぎに食べさせ、子ども達のうさぎの観察が始まった。

そんな、ある日、うさぎが枯れ葉を食べる姿を見て「うさぎって、茶色い葉っぱも食べるよ」と友達に教えていた。

#### (3) 名前「ココア」に決定（5月）

うさぎとの触れ合いが増すほど、子ども達のうさぎへのかかわり方にぎこちなさが見受けられるように感じた。どうも、うさぎに名前がないために、「うさちゃん」とか、「ぴよんこ」等と、思い思いに名前をつけて呼んでいる。ある時、うさぎの体調不良に気づいた子ども達が、「先生、ぴよんちゃんが大変です。」と訴えに来た。それを聞いた別の子が「ぴよんちゃんじゃなくて、うさちゃんだよ。」また別の子は、「ぴよんこが正しい呼び名だよ。」と言い張り、まさに、一発触発、喧嘩寸前にまでなってしまった。すると、どこからともなく、「みんなでうさぎに名前をつけようよ。」という提案がだされ、すんなり皆で、名前を決めることに決まった。

後日、子ども達から名前を募集し、「ココア」という名前がついた。理由は、毛並みがココア色で、呼び名も可愛いからということだった。

その後の子ども達のかかわり方は、「ココアちゃん、おいしい。」などと、以前にもまして「ぼくたち・わたしたちのココア」という意識が高まってきていた。

#### (4) 家作りがスタート（9月）

ハルミの「先生、もっとココアちゃんと遊べる場所がないかな？」との訴えから、ココアの家をつくることになった。トントントンと釘を打つ音に誘われて、他の女兒達も集まってき



た。慣れない手つきで釘を打ちながらも、その日は3枚の板をつなげ、「手が痛くなった」と言いながらも満足そうだった。

#### (5) 試行錯誤の連続（9月）

その後、子ども達の力では大きな板を組み合わせたり、釘を打ったりすることが難しいよう

だったので、薄い板を角材に打ちつけて梯子をつくり、その梯子を組み合わせて柵をつくることを提案した。家づくりはその後も続き、釘を打つ手にも力が入るようになるとリズムもよくなってきた。

(6)「ココア」の家やっと完成。しかし、すぐに問題発生(10月)



少しずつではあるが、いろいろな子どもが家づくりにかかわってきた。秋休み明け、こ

つこつとつくり続けたココアの家がとうとう完成した。自分達がつくった家でココアが駆け回る様子を見て「ココアちゃん気持ちよさそうだね」と喜んだ。

ところが、完成して間もない「ココア」の家で、問題が発生した。子ども達がつくった梯子状の柵は、板の間に隙間があり、そこから何度もココアが逃げてしまうのである。

(7)修正につぐ修正の末、願いどおりの「ココア」の家完成(10月)



ココアから逃げられては困るので、その場所の板と板の間を狭たり、また、

塀の高さを高くしたりしながら修正につぐ修正を重ねていった。でも、この修正の繰り返しが、子ども達の気持ちを「ココア」の気持ちに近づけていたようであった。すなわち、工夫を繰り返すことで、「ココア」になったつもりで、修正をだんだん行うようになっていた。また、「ここに、草を持ってくると、ココアちゃんお腹をすかせないで済むよね。」とか「ここに糞を敷いてあげると、ココアちゃん気持ちいいだろうな」というように、ココアになりきって、家のレイアウトまでも考えるようになってきていた。まさに、「うさぎ(ココア)が、子ども達を育てている場面」であった。そして、子ども達にとっ

てもココアにとっても心地よい居場所となる家ができあがった。



#### 4 考察

《うさぎを身近に感じることで、子ども達自らが環境に働き掛ける》

◎うさぎという親しみやすい動物に触れたり、世話したりする経験は生きているものへの温かな感情の芽生えや生命を大切にしようとする心の育ちにつながっていく。保育者は、これまでの飼育環境を見直し、子ども達がうさぎに直接触れたり、えさを与えたりすることができるように飼育環境を見直した。子ども達は、うさぎと直接触れ合う経験を重ねるうちに、「もっと広いところで」「自分達でココアちゃんの家をつくりたい」という願いをもった。その願いが遊びの目的となり、自分達で家づくりを行うという遊びを創造する姿につながった。

◎家づくりは予想以上に大掛かりなものとなり、思うようにすすめることができなかった。そこで、遊びの跡を残すこと、つくり方や材料の工夫を提示しながら、子ども達自身の手でつくりあげることができるように援助した。子ども達は、遊びの跡を見ながら遊びを振り返り、遊びを継続することができたようだ。また、遊びの跡を見た他の子ども達も遊びに加わるという遊びの広がりも見られた。

(山形大学附属幼稚園園長)

